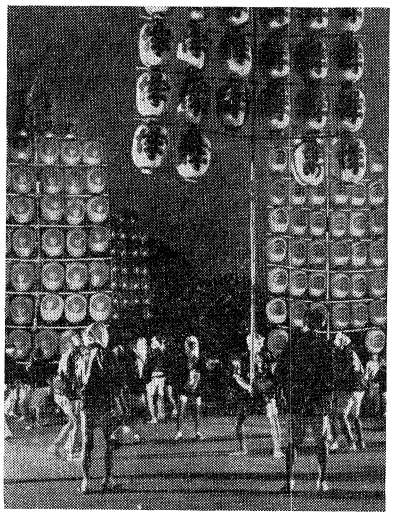
東北の祭り

三原良吉

弘前市と青森市のネブタ，秋田市の竿頭（カントウ），仙台市の七夕（カット写真）は東北を代表する夏祭りといってよいであろう。冬の長い雪国の陰うつとは打って変わった華やか祭りである。いずれも新暦の8月に行なわれ，ネブタは1日から7日まで，竿灯と仙台の七夕は6,7,8 の3日間であるから夏の東北観光にはうまく日程をとればこの3つを全部見てまわることができる。

青森と弘前のネブタは木と竹で組んで紙を張り，これに彩色した一種の灯篭で，扇灯篭と組ネブタと二通りある。扇灯篭は扇形のもので正面に三国志や水滸伝の武者絵，裏面に美人絵を描き，これを見送りという。組ネブタの方は人形型のもので，これも牛若弁慶，日本武尊，加藤清正の虎退治，渡辺　綱といった勇しい武者人形やエビス大黒のような縁喜物や桃太郎などもある。昔は中に数十本の蝋燭を灯したが今は電気の照明を装置してある。子供たちは金魚ネブタといって金魚型の灯篭に柄をつけたものを手に持つ。前にあげた2つは非常に大きなものであるが 15 尺高の制限があり，これに車をつけて引きまわし，子供たちは花笠に祭衣裳，タスキという姿で『イッペダセ・イッペダセ』と口々にはやし，後方にはネブタ独特の笛と太鼓のハヤシがつく。これが市内各町から出て市中を練りまわる。7日にはナヌカビと称して『ネブタ流れろ，マメノハとっぱれ』とはやしながら青森市は海岸へ，弘前市では岩木川に持って行って流す。

秋田市のカントウ



青森市のネブタ

秋田市の竿灯は，もと『眠り流し』と称し，竿灯というようになったのは昭和に入ってからである。長さ 5,6 間の竹竿に横竹を結び，これに七夕または若の字を書い提灯を 48,49 段につり下げ，向鉢巻に祭法被の若者が，かるがると額にのせたり，手のひらにのせたりして笛，太鼓のにぎやかなハヤシにつれ『オイタッサ』『ドウドッコイショ』のかけ声で町々を練りまわり技をきそい合うのである。

ネブタと竿灯には，にぎやかな祭りバヤシがつくが，仙台の七夕は音の無い祭である。七夕竹の飾りには昔から基本がある。短冊，吹流し，巾着，紙衣，千羽鶴，屑篭，七夕線香，灯入れ，行灯の8つで，これを五色の染め紙や金銀色の紙で作って青々した笹つきの竹の枝につり下げて家ごとに立てる。繁華街などでは見渡す限り空をおおいかくし，五彩の長い吹流しが夏の夕風にゆらめくさまは優美たとえようもない。祭バヤシがないので，さわやかな笹の葉ずれの音と見物する人々の歎声だけである。これも終れば広瀬川へ流して来る習わしであったが今は禁止されている。

以上のように3つの祭りは各異なった特色を持ってはいるが根本は田の神を迎えて稲作の保護を祈り，再び田の神を送る個有信仰であって，ネブタと竿灯には眠り流し，つまり夏の睡魔を労働の季節に除くという信仰が結びついているのである。　（筆者：郷土史研究家）